

「猪名川・藻川全体調査計画」に基づく  
河川水辺の国勢調査を行う上での  
猪名川における補足事項(案)

## 1. 作成・運用に向けたロードマップ（案）

これまで、河道掘削モニタリング及び簡易魚道モニタリングを実施してきたが、今後は河川水辺の国勢調査を活用して猪名川・藻川全体の環境変化の把握及び評価を実施する新たな取り組みを行っていくために、「河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）」（以下、「補足事項（案）」）を作成し、令和2年度から運用している。（表-1）。

## 2. 委員からの主な指摘と対応

令和6年度の猪名川自然環境委員会では、「河川環境基図」の調査結果のとりまとめ及び考察・評価の補足等に対する指導・助言をいただいた（表-2）。

令和7年度では、河川水辺の国勢調査の「猪名川・藻川全体調査計画（6巡目）」の立案を行っており、補足地点の取り扱いの変更や魚類に対する環境DNA分析などの追加及び調査時期の変更が行われている。

## 3. 補足事項（案）の更新

令和7年度の猪名川自然環境委員会では、いただいた指導・助言及び「猪名川・藻川全体調査計画（6巡目）」の結果を基に、「補足事項（案）」の更新版を作成し、別紙にとりまとめる予定である。



# 1.全体調査計画の見直し

- 猪名川水系の全体調査計画は、平成17年度に4巡目の計画が、平成27年度に5巡目の計画が策定された。各計画に対し、河川の現況や最新の河川水辺の国勢調査の実績等に基づき見直しが行われた。
- 令和8年度から令和17年度までの10年間の計画を策定するにあたり、「河川水辺の国勢調査全体調査計画策定の手引き(以下、手引きという)」(国土交通省水管理・国土保全局河川環境課、令和7年9月改訂)に基づき、検討を行った。
- 今回の手引きの改訂により、魚類環境DNA調査が新規追加されており、それに伴い、魚類採捕調査の実施頻度等を変更した。

- 今回のマニュアル改訂では、**魚類環境DNA調査が追加**されるとともに、**魚類採捕調査が【河川版】では5年に1回・2季から10年に1回・2季に変更**された。
- マニュアルに従い、【河川版】の魚類採捕調査については、魚類環境DNA調査と同じ調査実施年度に設定した。
- 魚類環境DNA調査については、水系全体を通じた生息・生育状況の把握・評価を可能とするため、同一水系内の調査実施年度を一致させるように設定した。

全体調査計画の改訂に伴う主な変更点

調査項目	調査実施の頻度	
	H28年全体調査計画	R7年全体調査計画
魚類採捕調査【河川版】	5年に1回(2季)	10年に1回(2季)
魚類環境DNA調査【河川版】	—	5年に1回(2季)

淀川水系調査年スケジュール(案)(猪名川・藻川抜粋版)

全体調査計画様式3

淀川水系 調査年度スケジュール計画			調査年度スケジュール																			
水系名	河川名	管理する事務所等 管理区間(km)	5巡目									6巡目										
			H28	H29	H30	R01(H31)	R02	R03	R04	R05	R06	R07	R08	R09	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16	R17
淀川水系	猪名川	0.0 ~ 14.1km	鳥類	魚類	底生動物	植物	河川環境基図作成	両生類・爬虫類・哺乳類	魚類	底生動物	陸上昆虫類等	河川環境基図作成	鳥類	魚類採捕調査	底生動物	植物	河川環境基図作成	両生類・爬虫類・哺乳類	魚類DNA調査	底生動物	陸上昆虫類等	河川環境基図作成
	藻川	0.0 ~ 4.8km											魚類DNA調査									

<凡例>

○：河川空間利用実態調査の実施(5巡目以降1回/5年)

—：調査対象外

■：1回/10年頻度の調査

■：1回/5年頻度の調査

※1. 河川・ダム湖環境情報図は河川・ダム湖環境基図作成調査の翌年に実施(1回/5年)

※2. 植物は、維管束植物(シダ植物・種子植物)調査を行う。

※3. 環境基図作成は、陸域調査、水域調査、構造物調査を行う。

※4. 魚類環境DNA調査については、水系全体を通じた生息・生育状況の把握・評価を可能とするため、同一水系内の調査実施年度を一致させるように設定することを推奨する。

# 1.全体調査計画の見直し

## (1) 調査地区

- アドバイザー助言等、既往調査結果、調査地区の改変等、今後の改変予定、マニュアルの改訂をもとに全体調査計画について見直しを行った。
- 全体調査計画の全調査項目についてヒアリング結果を反映し、魚類環境DNA調査を新設した。

各調査項目の全体調査計画の見直し結果

確認項目		魚類採捕	魚類環境DNA	底生動物	植物	鳥類	両生類・爬虫類・哺乳類	陸上昆虫類
見直し結果	調査地区の変更	あり	新設	あり	なし	なし	あり	あり
	調査時期の変更	なし	新設	あり	あり	なし	なし※	あり

※設定根拠の変更（時期の変更なし）

猪名川水系 全調査項目調査地区の設定結果一覧（猪名川）

距離	河川環境縦断区分	魚類採捕調査	底生動物調査	植物調査	鳥類調査(ホットスポット)	両生類・爬虫類・哺乳類調査	陸上昆虫類等調査	総合調査地区
0km	汽水域	淀猪猪1	淀猪猪1		淀猪猪 0.0L			☆
5km	下流区間	淀猪猪2	淀猪猪2			淀猪猪1	淀猪猪1	
		淀猪猪3	淀猪猪3	淀猪猪1			淀猪猪2	
10km	下流掘込区間	淀猪猪4	淀猪猪4	淀猪猪2	淀猪猪 7.0L	淀猪猪2	淀猪猪2	
		淀猪猪5	淀猪猪5	淀猪猪3			淀猪猪3	

※ 魚類環境DNA調査は調査対象範囲全域を対象として原則2kmごとに1地点、鳥類調査は調査対象範囲全域を対象として1km又は2kmごとに両岸に調査箇所を設定する。

猪名川水系 全調査項目調査地区の設定結果一覧（藻川）

距離	河川環境縦断区分	魚類採捕調査	底生動物調査	植物調査	鳥類調査(ホットスポット)	両生類・爬虫類・哺乳類調査	陸上昆虫類等調査	総合調査地区
0km	藻川汽水域			淀藻猪1	淀藻猪 1.0R	淀藻猪1	淀藻猪1	
5km	藻川下流域	淀藻猪1	淀藻猪1	淀藻猪2	淀藻猪 4.0L	淀藻猪2		

※ 魚類環境DNA調査は調査対象範囲全域を対象として原則2kmごとに1地点、鳥類調査は調査対象範囲全域を対象として1km又は2kmごとに両岸に調査箇所を設定する。

6巡目調査地区追加

調査項目	調査地区	
	追加前	追加後
魚類採捕調査	淀猪猪1	淀猪猪1
	(補足地点)	淀猪猪2(補足地点)
	淀猪猪2	淀猪猪3(旧淀猪猪2)
	淀猪猪3	淀猪猪4(旧淀猪猪3)
	淀猪猪4	淀猪猪5(旧淀猪猪4)
底生動物調査	淀藻猪1	淀藻猪1
	計5地区	計6地区

魚類環境DNA 調査の基本調査地点の設定結果

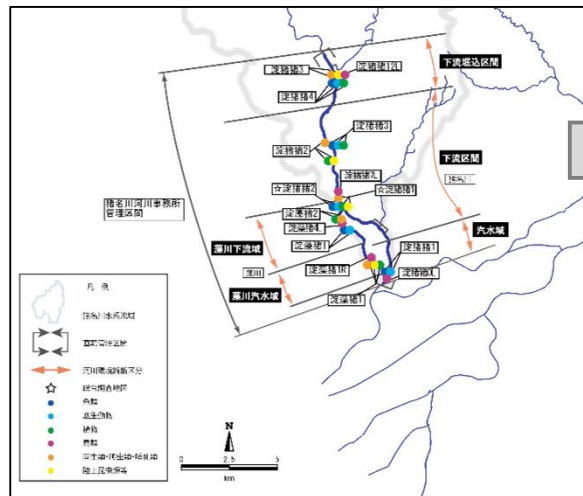
河川名	区間	距離	調査地点数
猪名川	汽水域	0.0km~2.4km	2地点
	下流区間(低地)	2.4km~10.4km	4地点
	下流掘込区間(丘陵地)	10.4km~12.6km	1地点
	魚類環境DNAホットスポット	-	1地点
藻川	汽水域(低地)	0.0km~2.4km	2地点
	藻川下流域(移行区間)(低地)	2.4km~4.4km	1地点
	魚類環境DNAホットスポット	-	1地点
合計調査地点数			12地点

魚類環境DNA ホットスポットの設定結果

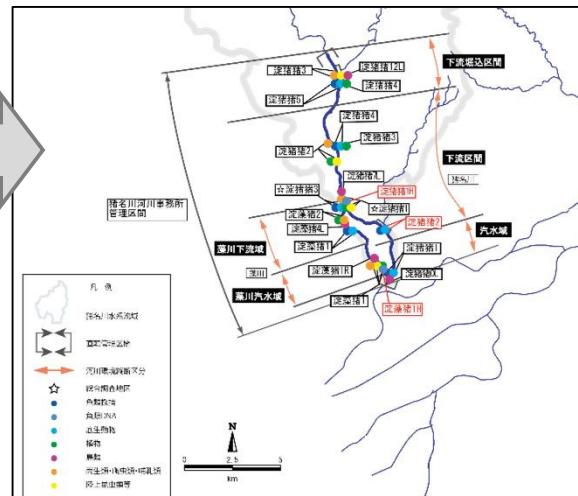
河川名	魚類環境DNAホットスポット調査地点番号	距離	左右岸
猪名川	淀猪猪1H	5.8km	左岸
藻川	淀藻猪1H	1.0km	中州

6巡目調査範囲修正

調査項目	調査範囲	
	変更前	変更後
両生類・爬虫類・哺乳類調査	11.6~12.6km右岸	11.4~11.9km右岸
陸上昆虫類等調査		



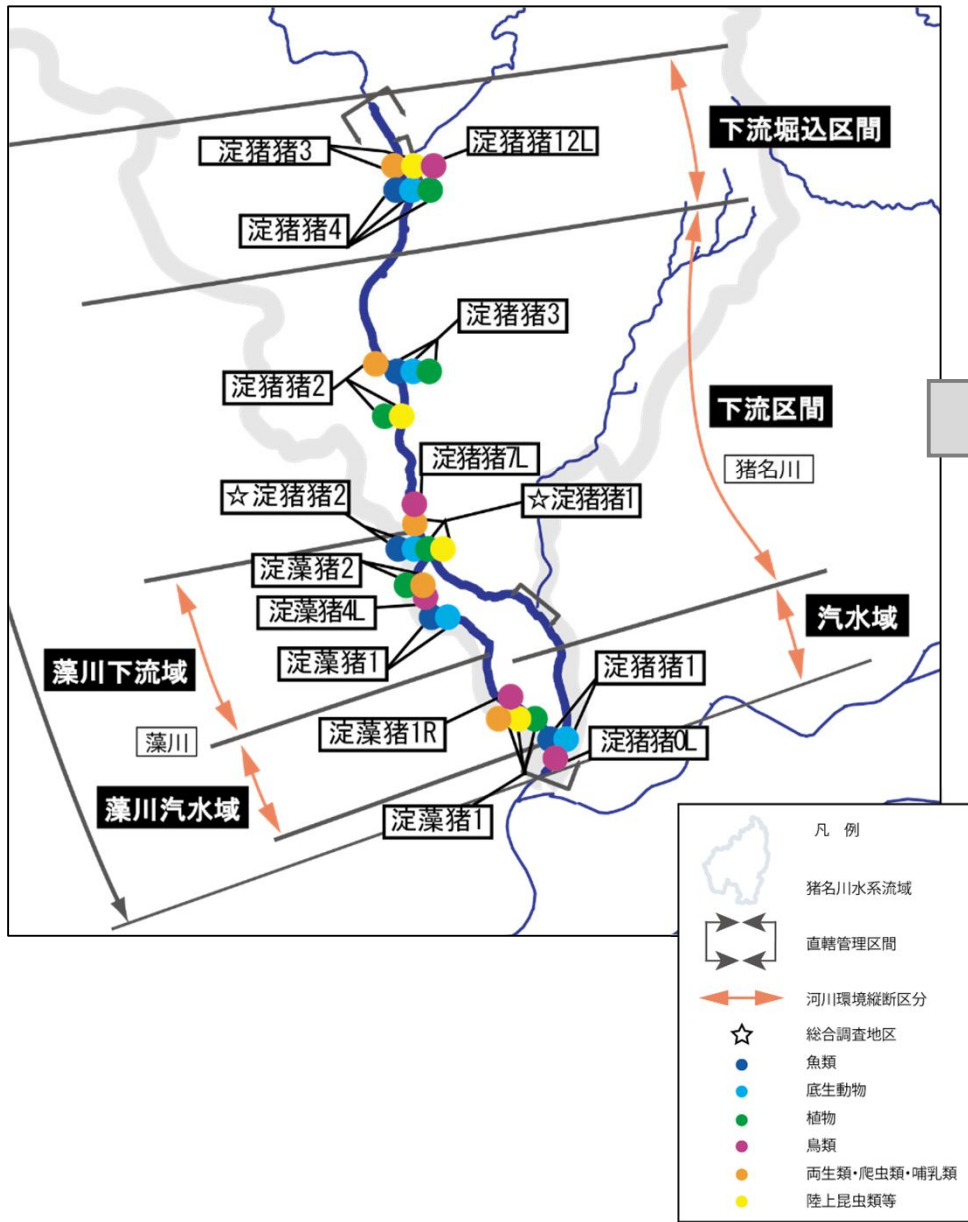
前回調査地区



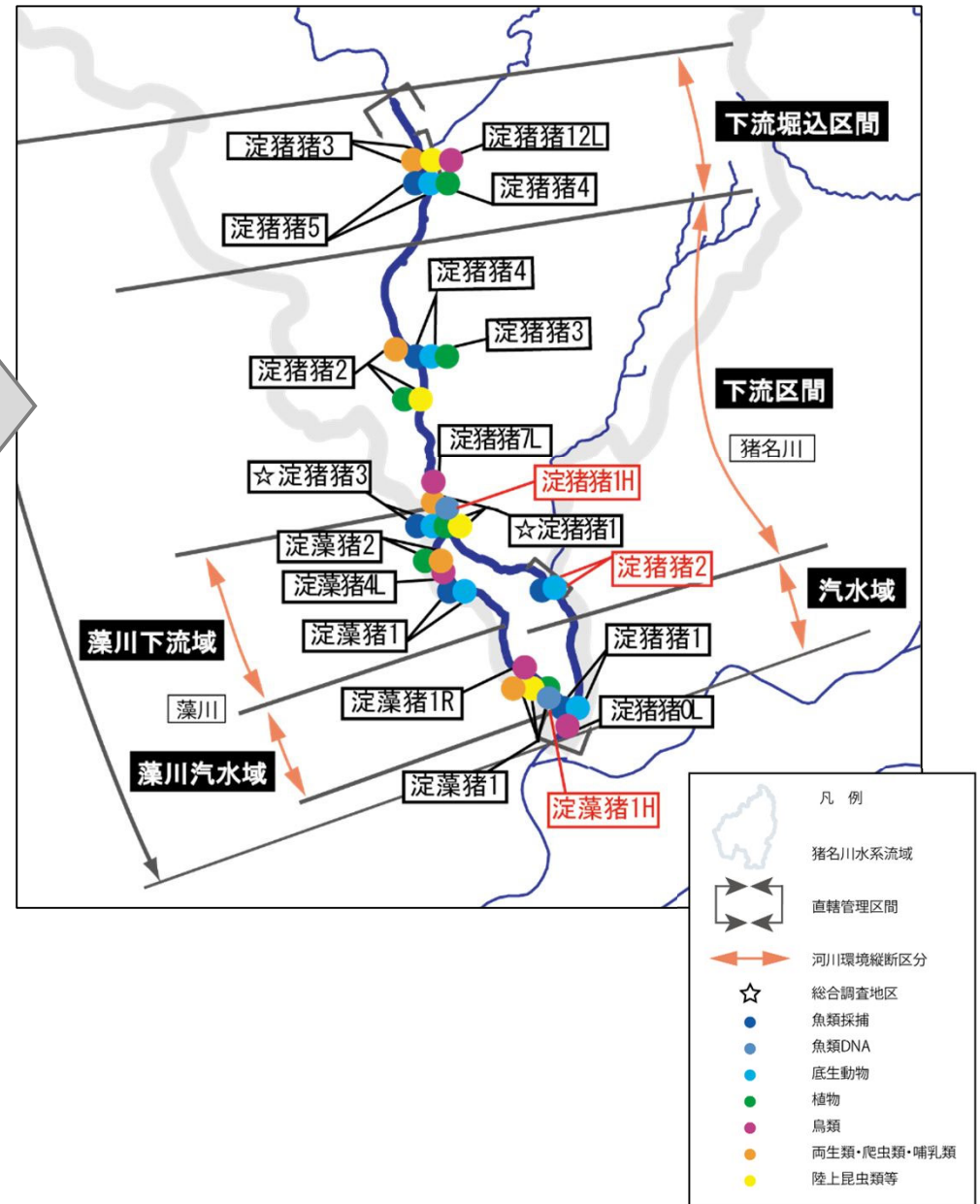
今回調査地区

# 1.全体調査計画の見直し

(1) 調査地区 (拡大図)



前回調査地区



今回調査地区

# 1.全体調査計画の見直し

## (2) 調査時期

- 全体調査計画の全調査項目についてヒアリング結果を反映した。

### 各調査項目の全体調査計画の見直し結果

確認項目		魚類採捕	魚類環境DNA	底生動物	植物	鳥類	両生類・爬虫類・哺乳類	陸上昆虫類
見直し結果	調査地区の変更	あり	新設	あり	なし	なし	あり	あり
	調査時期の変更	なし	新設	あり	あり	なし	なし※	あり

※設定根拠の変更（時期の変更なし）

全体調査計画様式 21-1

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(魚類採捕調査)

季節	時期	設定根拠
夏	5~6月	水温が上昇し魚類の活動が活発になる。両側回遊魚の遡上期に当たり、これらの移動状況が把握できる。多くの魚類の稚魚期に当たり、これらの生息場所が確認できる。汽水・海水魚の稚魚が成長のために河口へ侵入し、多くの種の確認が期待される。
秋	10~11月	秋産卵の魚類の生息状況が把握できる。稚魚が成長し、同定が確実になる。河口へ侵入する汽水・海水魚の種が春と異なり、全体的な魚類相が把握できる。また、アユが海に降下する時期となり、回遊するアユの状況を把握できる。なお、これ以降は水温が低下し魚類の活性が低下するため、注意が必要である。

全体調査計画様式 21-4

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(植物調査)

季節	時期	設定根拠
春	4~5月	春季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる春咲きのイネ科植物の同定が確実にできる。
秋	10月	秋季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる秋咲きのイネ科植物やカヤツリグサ科植物の同定が確実にできる。

変更：5月→4~5月

全体調査計画様式 21-5

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(鳥類調査)

季節	時期	設定根拠
繁殖期	5月下旬~6月	渡りのための移動が完了し、調査地区における鳥類の繁殖状況が確認できる。テリトリー誇示のための囀り、雛へ給餌するための餌運び、巣立ち雛の確認などで繁殖状況を把握する。
越冬期	12月下旬~1月下旬	越冬地に定住する時期であり、調査地区における鳥類の越冬状況が把握できる。猪名川直轄管理区間では、緩やかな流れを反映し全域でカモ類が越冬する。

全体調査計画様式 21-6

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	気候が温暖で、小動物の活動が活発になる時期である。両生類は繁殖時期に当たり、鳴き声により生息確認できる。また、卵や幼生の確認により繁殖場所が把握できる。ネズミ類の春の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。
夏	7~8月	カエル類の変態時期に当たり、幼体の調査地区の利用状況が把握できる。カメ類およびヘビ類は活動が活発になり、確認しやすい。なお、エサが昆虫類等に食べられ、無効罠が発生することから、哺乳類の捕獲トラップ調査は実施しない。
秋	10~11月	夏と比べ気候が温暖になり、小動物の活動が活発になる時期である。トカゲ類は幼体の出現で個体数が増し確認しやすい。ネズミ類の秋の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。

全体調査計画様式 21-7

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(陸上昆虫類等調査)

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	春季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。開花する植物が多く、訪花性の昆虫類が多い。サナエトボ類やヒメハナバチ類などはこの時期に出現する種が多い。
夏	7~8月	夏季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。梅雨明け後の時期で、陸上昆虫類等の活動が活発になる。カメムシ目はこの時期に出現する種が多い。
秋	9~11月	秋季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。盛夏が去り、夏眠していた種や秋季に成虫となる種(バッタ目やゴキブリ類等)が確認できる。

変更：9~10月→9~11月

全体調査計画様式 21-2

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(魚類環境DNA調査)

新設

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	水温の上昇期で、コイ科、ドジョウ科等の多くの淡水魚や、シロウオやウキゴリ属といった汽水域のハゼ類重要種の産卵・繁殖期に当たり、環境DNAを検出しやすい時期となる。また、アユを代表とする両側回遊魚の遡上期にあたるため、遡上生態の確認も期待できる。
秋	9~10月	多くの淡水魚の季節移動が確認できるほか、河口に入る汽水魚が多くなる時期であるため、回遊魚や汽水・海水魚に由来する環境DNAを検出しやすい。また、アユの産卵期にあたり産卵生態の確認が期待できる。

全体調査計画様式 21-3

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(底生動物調査)

季節	時期	設定根拠
夏	7~8月	猪名川の水生昆虫の主要な構成グループであるカゲロウ目、トビケラ目について、夏季から秋季に羽化する種の終齢幼虫が確認でき、同定が確実にできる。また、コウチュウ目やカメムシ目は成虫が出現し、同定が確実にできる。
早春	12~2月	水生昆虫の多くが幼虫あるいは蛹の時期であり、水中生活する。このため、最も多くの種が確認できる。春季に羽化する種については、終齢幼虫のため同定が確実にできる。

変更：1~2月→12~2月

## 2.魚類採捕(調査地区の変更)

- 魚類採捕調査は、これまで工事モニタリングの補足地点を含めて経年的に調査が実施されている。これらの調査は「河川水辺の国勢調査マニュアル」に基づき統一手法で行われており、比較可能なデータとして整理されていることから、経年的な評価が可能な調査手法である。
- そのため、6巡目の調査以降では、補足地点を正規の調査地区として設定し、計6地区で調査を継続することとする。

全体調査計画様式9-1

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(魚類採捕調査)

河川名	河川環境 縦断区分	調査地区番号 (前回調査)	調査地区番号 (今回設定)	総合 調査 地区	距離	調査地区名	河床勾配	河川形態	設定または変更理由	調査地区の特徴	前回の調査地区との対応
猪名川 (直轄管理区間)	汽水域 (低地)	旧淀猪猪1	淀猪猪1		0.4~0.6km (猪名川) 0.0~0.6km (藻川)	藻川 合流点	1/668	Bc 型	感潮域であり、回遊魚、海水魚の確認のために重要な地区である。 したがって継続して調査地区を設定する。	猪名川部分は低水敷全面が開放水面になり、コンクリート護岸と なっている。 藻川には寄洲が形成され、一部に干潟が出現する。水際にはヨシが 分布する。	前回の淀猪猪1と同じ調査地区で ある。
	下流区間 (低地)	-	淀猪猪2		3.0~4.0km (猪名川)	千里川 合流部	1/668	Bc 型	藻川分派点~藻川合流間に調査地区のない猪名川においてワンド・たまり等の状況を把握するため、H29およびR4調査時には補足 地点として調査が実施されている。 河道掘削工事のモニタリングとして、経年的に調査が実施されてい ることから、新たに調査地区として設定する。	水際にはツルヨシ群集などの湿生植物やヤナギ林が分布し、水域 の環境区分としてもワンド、早瀬、淵、その他(平瀬)などの環境が存在 している。	新規設定。 前回の補足地点①と同じ調査地 区である。
		旧淀猪猪2	淀猪猪3	☆	5.4~ 6.0km	藻川 分派点	1/442	Bb 型	流れが緩やかで、砂州の発達する猪名川下流域に代表的な地区で ある。 礫河原が広がり、早瀬、細流、ワンドなど多様な水域環境を有し、淡 水性を中心とした多くの魚種が確認される。 したがって継続して調査地区を設定する。	藻川との分派点に位置し、早瀬、細流、ワンドなど多様な水域環境 が見られる。	前回の淀猪猪2と同じ調査地区で ある。
		旧淀猪猪3	淀猪猪4		8.4~ 9.0km	高木井堰 (8.8k) 付近	1/351	Bb 型	高木井堰の上下流を含む地点で、堰下流には淀猪猪2では見られ ない早瀬が存在し、堰上流には湛水域、ワンドなどがあり流れが緩 やかな環境が存在する。 淀猪猪3(旧淀猪猪2)と淀猪猪5(旧淀猪猪4)の結果と対比すること で、魚類の遡上状況が確認できる。 したがって継続して調査地区を設定する。	高木井堰下流には早瀬、上流には湛水域、孤立水域など、多様な 水域が見られる。 寄州が発達し、礫河原の水際の一部にはツルヨシ群集が分布する。	前回の淀猪猪3と同じ調査地区で ある。
	下流 堀込区間 (丘陵地)	旧淀猪猪4	淀猪猪5		11.6~ 12.0km	加茂井堰 (11.9k) 付近	1/311	Bb 型	直轄管理区間の上流端付近に位置し、加茂井堰が存在する。 下流に比べ川幅が狭まり、流速はやや速くなるため、下流域の魚種 に加えて中流域の魚種が確認される。 したがって継続して調査地区を設定する。	川幅が狭まり、流速はやや速くなる。 堰上流はコンクリート護岸となっている。堰下流は右岸に寄州が形 成され、礫河原が広がり水際の一部にツルヨシ群集が分布する。	前回の淀猪猪4と同じ調査地区で ある。
(直 轄 管 理 区 間) 藻川 下流域 (低地)	旧淀藻猪1	淀藻猪1		3.6~ 4.2km	大井井堰 (4.0k) 付近	1/678	Bb 型	河口から最初の堰であり、回遊種がその下流に留まることにより確認 しやすい。 大井井堰の上下流に多様な水域が見られ、多くの魚種が生息す る。 したがって継続して調査地区を設定する。	堰の存在によりその上流側の湛水、緩流部、下流側の早瀬など多様 な水域が見られる。 寄州の形成が顕著で、水際にはヤナギ類など樹林、オギ、ツルヨシ 等の草本が繁茂する。	前回の淀藻猪1と同じ調査地区で ある。	

青字: 前回調査を実施しているが、今回は設定しない調査地区 赤字: 新たに設定した調査地区

## 2. 魚類環境DNA(新設)

全体調査計画様式 21-2

- 魚類環境DNA 調査は、全川の魚類の生息状況を網羅的または俯瞰的に把握するため、魚類採捕調査の調査地区の設定状況に関わらず、河川縦断方向の距離間隔2kmごとに調査地点を1地点設定(基本調査地点)することを基本とした。また、汽水域(干潮時に出現する干潟内の滞筋等)ならびに、河川に特徴的な環境(ワンド・たまり等)を魚類環境DNA ホットスポットとして追加設定することとなっている。
- 調査時期の検討にあたって、猪名川における直近3回の調査(平成24年、平成29年、令和4年)で確認された重要種の産卵・繁殖期および稚仔魚の遡上期を整理した。猪名川では、特に春季(5月)に重要種の産卵期等が重なっており、既往確認重要種の環境DNA が検出されやすい時期と考えられる。

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(魚類環境DNA調査)

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	水温の上昇期で、コイ科、ドジョウ科等の多くの淡水魚や、シロウオやウキゴリ属といった汽水域のハゼ類重要種の産卵・繁殖期にあたり、環境DNAを検出しやすい時期となる。また、アユを代表とする両側回遊魚の遡上期にあたるため、遡上生態の確認も期待できる。
秋	9~10月	多くの淡水魚の季節移動が確認できるほか、河口に入る汽水魚が多くなる時期であるため、回遊魚や汽水・海水魚に由来する環境DNAを検出しやすい。また、アユの産卵期にあたり産卵生態の確認が期待できる。

全体調査計画様式9-2-1

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(魚類環境DNA調査:調査地点距離間隔)

河川名	区間	距離	調査地点(採水地点)の距離間隔の設定	調査地点数
猪名川	汽水域	0.0km~2.4km	0.0kpを最下流の調査地点とし、約2kmごとに調査地点(採水地点)を設定する。なお、本区間は感潮区間の内河口から干潮時に干潟が見られる区間であるため、満潮時、干潮時の2回採水を行う。	2地点
	下流区間(低地)	2.4km~10.4km	約2kmごとに調査地点(採水地点)を設定する。	4地点
	下流堀込区間(丘陵地)	10.4km~12.6km	約2kmごとに調査地点(採水地点)を設定する。	1地点
	魚類環境DNAホットスポット	-	全体調査計画様式9-2-2で設定した魚類環境DNAホットスポットにおいて調査を実施する。	1地点
藻川	汽水域(低地)	0.0km~2.4km	0.0kpを最下流の調査地点とし、約2kmごとに調査地点(採水地点)を設定する。なお、本区間は感潮区間の内河口から干潮時に干潟が見られる区間であるため、満潮時、干潮時の2回採水を行う。	2地点
	藻川下流域(移行区間)(低地)	2.4km~4.4km	約2kmごとに調査地点(採水地点)を設定する。	1地点
	魚類環境DNAホットスポット	-	全体調査計画様式9-2-2で設定した魚類環境DNAホットスポットにおいて調査を実施する。	1地点
合計調査地点数				12地点

全体調査計画様式9-2-2

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(魚類環境DNA調査:魚類環境DNAホットスポットの設定)

河川名	魚類環境DNAホットスポット調査地点番号	距離	左右岸	魚類環境DNAホットスポット調査地点の設定根拠	
				魚類の出現状況等の観点	生息場等河川内の生息場環境の観点
猪名川	淀猪猪1H	5.8km	左岸	既往の魚類調査地区であり、フナ属、ニゴイ属、ナマズ等の稚魚~幼魚が確認されているため、再生産の場となっているかを確認するため、設定する。	淀猪猪2の河道掘削を行った際の環境配慮事項は「水陸移行帯の創出再生」であり、その創出状況を把握するため、魚類採捕調査と同一範囲にあるワンドを、再生産の場としての評価指標に関するデータ収集の一環として、環境DNA調査地点に位置付けるため、設定する。
藻川	淀藻猪1H	1.0km	中州	魚類調査地区外ではあるが、汽水域であることや下流の調査地区(淀猪猪1)でハゼ類が多く確認されているため、設定する。	干潟に生息する魚類の環境DNA調査地点として適当とみなせるため設定する。

### 3.底生動物(調査地区、調査時期の変更)

- 底生動物調査は、これまで工事モニタリングの補足地点を含めて経年的に調査が実施されている。これらの調査は「河川水辺の国勢調査マニュアル」に基づき統一手法で行われており、比較可能なデータとして整理されていることから、経年的な評価が可能な調査手法である。
- そのため、6巡目の調査以降では、補足地点を正規の調査地区として設定し、計6地区で調査を継続することとする。
- また、調査時期については、基本的には平成28年全体調査計画の調査時期を踏襲するが、早春季調査時期については、「1月～2月」ではなく、12月に調査を行うように意見があったことから、過年度では12月に調査を実施している。そのため、本改訂では、「12月～2月」と調査時期の範囲に幅を持たせるように変更した。

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(底生動物調査)

全体調査計画様式 21-3

季節	時期	設定根拠
夏	7～8月	猪名川の水生昆虫の主要な構成グループであるカゲロウ目、トビケラ目について、夏季から秋季に羽化する種の終齢幼虫が確認でき、同定が確実にできる。また、コウチュウ目やカメムシ目は成虫が出現し、同定が確実にできる。
早春	12～2月	水生昆虫の多くが幼虫あるいは蛹の時期であり、水中生活する。このため、最も多くの種が確認できる。春季に羽化する種については、終齢幼虫のため同定が確実にできる。

変更：1～2月→12～2月

全体調査計画様式9-3

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(底生調査)

河川名	河川環境 縦断区分	調査地区番号 (前回設定)	調査地区番号 (今回設定)	総合 調査 地区	距離	調査地区名	河床勾配	河川形態	設定または変更理由	調査地区の特徴	前回の調査地区との対応
猪名川 (直轄管理区間)	汽水域 (低地)	旧淀猪猪1	淀猪猪1		0.4～0.6km (猪名川) 0.0～0.6km (藻川)	藻川 合流点	1/668	Bc 型	感潮域であり、汽水性の底生動物が生息する重要な地区である。 したがって継続して調査地区を設定する。	猪名川部分は低水敷全面が開放水面になり、コンクリート護岸となっている。 藻川には寄洲が形成され、一部に干潟が出現する。水際にはヨシが分布する。	前回の淀猪猪1と同じ調査地区である。
	下流区間 (低地)	-	淀猪猪2		3.0～4.0km (猪名川)	千里川 合流部	1/668	Bc 型	藻川分派点～藻川合流間に調査地区のない猪名川においてワンド・たまり等の状況を把握するため、H30およびR5調査時には補足地点として調査が実施されている。 河道掘削工事のモニタリングとして、経年的に調査が実施されていることから、新たに調査地区として設定する。	水際にはツルヨシ群集などの湿生植物やヤナギ林が分布し、水域の環境区分としてもワンド、早瀬、淵、その他(平瀬)などの環境が存在している。	新たに設定した調査地区である。
		旧淀猪猪2	淀猪猪3	☆	5.4～ 6.0km	藻川 分派点	1/442	Bb 型	流れが緩やかで、砂州の発達する猪名川下流域に代表的な地区である。 礫河原が広がり、早瀬、細流、ワンドなど多様な水域環境を有し、淡水性を中心とした多くの種が確認される。 したがって継続して調査地区を設定する。	藻川との分派点に位置し、早瀬、細流、ワンドなど多様な水域環境が見られる。	前回の淀猪猪2と同じ調査地区である。
		旧淀猪猪3	淀猪猪4		8.4～ 9.0km	高木井堰 (8.8k) 付近	1/351	Bb 型	高木井堰の上下流を含む地点で、堰下流には淀猪猪2では見られない早瀬が存在し、堰上流には湛水域、ワンドなどがあり流れが緩やかな環境が存在する。 したがって継続して調査地区を設定する。	高木井堰下流には早瀬、上流には湛水域、孤立水域など、多様な水域が見られる。 寄州が発達し、礫河原の水際の一部にはツルヨシ群集が分布する。	前回の淀猪猪3と同じ調査地区である。
	下流 堀込区間 (丘陵地)	旧淀猪猪4	淀猪猪5		11.6～ 12.0km	加茂井堰 (11.9k) 付近	1/311	Bb 型	直轄管理区間の上流端付近に位置し、加茂井堰が存在する。 下流に比べ川幅が狭まり、流速はやや速くなるため、下流域の種に加えて中流域の種が確認される。 したがって継続して調査地区を設定する。	川幅が狭まり、流速はやや速くなる。 堰上流はコンクリート護岸となっている。堰下流は右岸に寄州が形成され、礫河原が広がり水際の一部にツルヨシ群集が分布する。	前回の淀猪猪4と同じ調査地区である。
(直轄 藻川 管理区 区)	藻川下流域 (低地)	旧淀藻猪1	淀藻猪1		3.6～ 4.2km	大井井堰 (4.0k) 付近	1/678	Bb 型	大井井堰上流の湛水域、緩流部、堰下流の早瀬など多様な水域環境が存在する。 寄州が発達し、水際は植生帯となる。藻川で環境の多様性が高い地区である。 したがって継続して調査地区を設定する。	堰の存在によりその上流側の湛水域、緩流部、下流側の早瀬など多様な水域が見られる。 寄州の形成が顕著で、水際にはヤナギ類など樹林、オギ、ツルヨシ等の草本が繁茂する。	前回の淀藻猪1と同じ調査地区である。

青字: 前回調査を実施しているが、今回は設定しない調査地区 赤字: 新たに設定した調査地区

# 4.両生類・爬虫類・哺乳類(調査地区、調査時期の設定根拠の変更)

- 両生類・爬虫類・哺乳類調査の調査地区の「淀猪猪3」は右岸側において護岸工事が実施され、当初設定時に広がっていた低茎草地在失われ、現在は裸地や人工構造物が多くを占めている。
- このため、当初想定した環境の確認が困難となっている状況であることから、護岸が整備された区間については調査範囲から除外し、代替地として調査区間をわずかに下流側へ拡張することとした。
- 変更後の範囲は、従来調査していた環境(低茎草地等)を引き続き評価できるよう配慮し、確認環境の連続性が損なわれないように設定している。

全体調査計画様式 21-6

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	気候が温暖で、小動物の活動が活発になる時期である。両生類は繁殖時期にあたり、鳴き声により生息確認できる。また、卵や幼生の確認により繁殖場所が把握できる。 ネズミ類の春の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。
夏	7~8月	カエル類の変態時期に当たり、幼体の調査地区の利用状況が把握できる。カメ類およびヘビ類は活動が活発になり、確認しやすい。 なお、エサが昆虫類等に食べられ、無効罠が発生することから、哺乳類の捕獲トラップ調査は実施しない。
秋	10~11月	夏と比べ気候が温暖になり、小動物の活動が活発になる時期である。トカゲ類は幼体の出現で個体数が増し確認しやすい。 ネズミ類の秋の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。

全体調査計画様式9-6

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

河川名	河川環境縦断区分	調査地区番号(前回設定)	調査地区番号(今回設定)	総合調査地区	距離	左右岸	調査地区名	河床勾配	河川形態	設定または変更理由	調査地区の特徴	前回の調査地区との対応	
猪名川 (直轄管理区間)	下流区間 (低地)	旧淀猪猪1	淀猪猪1	☆	5.5~6.0km	左右岸	藻川分派点	1/422	Bb型	藻川との分派点に位置し、調査地区下流側は、ヨシ、オギがまとまって分布し一部にセイタカヨシが生育する。上流側は礫河原が広がり一年生草本が分布し、多様で自然度の高い環境がみられ、重要な地区である。 したがって継続して調査地区を設定する。	猪名川、藻川との分派点で、左岸高水敷は芝地であるが、低水敷や中州には一年生草本、ツルヨシなどの植生が見られる。分派点に位置することから、水域の形態も多様である。堤内地には市街地や農地が広がる。	前回の淀猪猪1と同じ調査地区である。	
		旧淀猪猪2	淀猪猪2		8.4~9.0km	左岸	高木井堰(8.8k)付近	1/351	Bb型	直轄管理区間内のうち、ヤナギなどの樹林が比較的多く分布する区域である。 高木井堰が位置し、多様な植生や水域環境が見られる。平成23年度および令和3年度の調査において、特定外来生物であるアライグマが経年的に確認された唯一の地区である。 したがって継続して調査地区を設定する。	高木井堰上流の高水敷は整備されているが、堰下流には広い河原を有し、ツルヨシ、セイタカヨシ等の高茎草地やヤナギ林が見られる。細流もあり、環境に変化に富んでいる。堤内地には市街地や農地が広がる。	前回の淀猪猪2と同じ調査地区である。	
	下流堀込区間 (丘陵地)	旧淀猪猪3	-			11.6~12.2km	右岸	加茂井堰(11.9k)付近	1/311	Bb型	河道が直線化する下流堀込区間のうち、寄洲上に植生が最も発達する地区であり、当区間の動物相が把握できる。 前回策定時以降に護岸が整備されたことにより、調査地区内の環境が変化したことから調査範囲を変更する。	水際にはツルヨシ群集が分布し、陸側にオギ群落、セイタカアワダチソウ群落などが見られる。堤内地には市街地、農地が広がるが、左岸では近くまで山塊が迫る。	前回の淀猪猪3と同じ調査地区である。
		-	淀猪猪3			11.4~11.9km	右岸	加茂井堰(11.9k)付近	1/311	Bb型	河道が直線化する下流堀込区間のうち、寄洲上に植生が最も発達する地区であり、当区間の動物相が把握できる。 しかし、既往の調査範囲に護岸が整備されたことにより、低茎草地等の環境が喪失した。そのため、調査範囲を下流側へと移動させ、同様の環境が残存する区域を対象として設定する。	水際にはツルヨシ群集が分布し、陸側にオギ群落、セイタカアワダチソウ群落などが見られる。堤内地には市街地、農地が広がるが、左岸では近くまで山塊が迫る。	前回の淀猪猪3を含む調査地区である。
(直轄管理区間) 藻川	藻川汽水域 (低地)	旧淀藻猪1	淀藻猪1		0.0~1.0km	右岸	藻川橋付近	1/678	Bc型	感潮区間であり、過湿な河川敷が発達し、ヨシ群落分布する。 藻川汽水域で自然度が高く代表的な環境の地区であり、当区間の動物相が把握できる。 したがって継続して調査地区を設定する。	汽水域で水際は狭くヨシやオギなど高径草本群落分布する。高水敷はセイバンモロコシ等が優占する人工草地となる。堤内地には市街地が広がる。	前回の淀藻猪1と同じ調査地区である。	
	藻川下流域 (低地)	旧淀藻猪2	淀藻猪2		3.9~4.8km	左岸	大井井堰(4.0k)付近	1/678	Bb型	藻川の中で最も広く起伏に富んだ低水敷が発達し、ヨシ群落、オギ群落、セイタカヨシ群落が広がる。細流やワンドがみられ、藻川のうち自然度の高い代表的な環境である。 したがって継続して調査地区を設定する。	河原が発達し、細流や孤立水域も見られる。植生はヨシ、オギ、セイタカヨシ等の高茎草地在が主体で、ヤナギ等の高木も点在する。堤内地には市街地や農地が広がる。	前回の淀藻猪2と同じ調査地区である。	

青字: 前回調査を実施しているが、今回は設定しない調査地区 赤字: 新たに設定した調査地区

# 5.陸上昆虫類(調査地区、調査時期の変更)

- 陸上昆虫類等調査の調査地区の「淀猪猪3」は右岸側において護岸工事が実施され、当初設定時に広がっていた低茎草地在り失われ、現在は裸地や人工構造物が多くを占めている。
- このため、当初想定した環境の確認が困難となっている状況であることから、護岸が整備された区間については調査範囲から除外し、代替地として調査区間をわずかに下流側へ拡張することとした。
- 変更後の範囲は、従来調査していた環境(低茎草地等)を引き続き評価できるよう配慮し、確認環境の連続性が損なわれないように設定している。

全体調査計画様式 21-7

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(陸上昆虫類等調査)

季節	時期	設定根拠
春	5~6月	春季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。開花する植物が多く、訪花性の昆虫類が多い。サナエトシガ類やヒメハナバチ類などはこの時期に出現する種が多い。
夏	7~8月	夏季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。梅雨明け後の時期で、陸上昆虫類等の活動が活発になる。カメシメジはこの時期に出現する種が多い。
秋	9~11月	秋季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。盛夏が去り、夏眠していた種や秋季に成虫となる種(バッタ目やゴキブリ類等)が確認できる。

変更: 9~10月→9~11月

全体調査計画様式 9-7

猪名川水系 調査項目別調査地区の設定結果一覧(陸上昆虫類等調査)

河川名	河川環境縦断区分	調査地区番号(前回設定)	調査地区番号(今回設定)	総合調査地区	距離	左右岸	調査地区名	河床勾配	河川形態	設定または変更理由	調査地区の特徴	前回の調査地区との対応
猪名川(直轄管理区間)	下流区間(低地)	旧淀猪猪1	淀猪猪1	☆	5.2~5.5km	左右岸	藻川分派点	1/668	Bb型	藻川との分派点に位置し、調査地区下流側は高径草本が分布し、上流側は礫河原が広がるとともに細流もあり、多様で自然度の高い環境がみられ、重要な地区である。したがって継続して調査地区を設定する。	河川敷は広く、高水敷は公園、低水敷にはツルヨシ、オギ、一年生草本群落などの多様な草地在り広がる。藻川との分派点のため流路も複雑で多様である。堤内には市街地、農地が立地する。	前回の淀猪猪1と同じ調査地区である。
		旧淀猪猪2	淀猪猪2		7.2~7.8km	左右岸	箕面川合流点	1/422	Bb型	猪名川ワンド公園を含み、環境整備後の陸上昆虫類等を追跡する。礫河原には草本群落、ワンド周辺には樹林が分布し、多様な環境がみられる。令和6年度の調査では最も多くの種が確認され、重要な種のカメシメジが生息している。したがって継続して調査地区を設定する。	整備されたワンドの縁にはヤナギ類やハリエンジュ群落などの樹林、箕面川合流点下流には礫河原が広がり一年生草本やツルヨシ群落など草本が分布する。堤内には市街地、農地が立地する。	前回の淀猪猪2と同じ調査地区である。
	下流堀込区間(丘陵地)	旧淀猪猪3	-		11.6~12.6km	右岸	加茂井堰(11.9k)付近	1/311	Bb型	河道が直線化する下流堀込区間のうち、寄州上に植生が最も発達する地区あり、当区間の陸上昆虫類相が把握できる。前回策定時に降に護岸が整備されたことにより、調査地区内の環境が変化したことから調査範囲を変更する。	水際にはツルヨシ群落分布し、陸側にオギ群落、セイタカアワダチソウ群落などが見られる。堤内には市街地、農地が広がるが、左岸では近くまで山塊が迫る。	前回の淀猪猪3と同じ調査地区である。
		-	淀猪猪3		11.4~11.9km	右岸	加茂井堰(11.9k)付近	1/311	Bb型	河道が直線化する下流堀込区間のうち、寄州上に植生が最も発達する地区であり、当区間の陸上昆虫類相が把握できる。しかし、既往の調査範囲に護岸が整備されたことにより、低茎草地等の環境が喪失した。そのため、調査範囲を下流側へと移動させ、同様の環境が残存する区域を対象として設定する。	水際にはツルヨシ群落分布し、陸側にオギ群落、セイタカアワダチソウ群落などが見られる。堤内には市街地、農地が広がるが、左岸では近くまで山塊が迫る。	前回の淀猪猪3を含む調査地区である。
(直轄管理区間)藻川区間	藻川汽水域(低地)	旧淀藻猪1	淀藻猪1		0.0~1.0km	右岸	藻川橋付近	1/678	Be型	感潮区間であり、過湿な河川敷が発達し、ヨシ群落分布する。藻川汽水域で自然度が高く代表的な環境の地区であり、汽水性の昆虫類の生息が期待される。猪名川の汽水域にはヨシ原がほとんど見られないことから、猪名川水系の汽水域の代表地区に位置づける。したがって継続して調査地区を設定する。	汽水域で水際には狭くヨシやオギなど高径草本群落分布する。高水敷はセイインモロコシ等が優占する人工草地となる。一部に干潟が出現する。堤内には市街地が広がる。	前回の淀藻猪1と同じ調査地区である。

青字: 前回調査を実施しているが、今回は設定しない調査地区 赤字: 新たに設定した調査地区

# 6.植物(調査時期の変更)

全体調査計画様式 21-4

猪名川水系 調査項目別調査時期設定結果一覧(植物調査)

季節	時期	設定根拠
春	4~5月	春季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる春咲きのイネ科植物の同定が確実にできる。
秋	10月	秋季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる秋咲きのイネ科植物やカヤツリグサ科植物の同定が確実にできる。

変更: 5月→4~5月